

初夢

森岡 正作

元朝の怒濤の飛沫浴びに行く
寝返りをして初夢に逃げらるる
暇人の鳩に御慶を申さるる
スポーツカー車庫に眠らせ雪籠
振り返る山に猟銃音二つ
しんがりは栗鼠にかまくる探梅行
冬銀河言葉持つゆゑ傷つけり

野火追ひて

季語の「野焼」「山焼」と言えば
管理下で行われる感じであるが、「野
火」は少し違う。登四郎先生の〈野
火追ひて走りし夢をいまも見る〉と
いう御句には、懐かしい思い出が蘇
る。昔は野火を付けて遊んだことが
あり、ちょっとした炎の色や形に見
惚れ、火の奔る姿に見とれた。そし
て仲間が一人二人いると心強くなり
冒険をした。思わぬ風に煽られた火
が枯れ草から藪に回り、びつくりし
て慌てふためくこともあった。幸い
その時は行く手の小川に助けられた
が、棒で叩くだけでは消し切れず、
着ていたものではないて上着をぼろ
ぼろにしたこともあった。

火は当然恐ろしいものであるが、
小さい火には親しみのような温かさ
がある。子供の頃、焚き火があれば
大人の中に交じり、冗談を聞いたり
からかわれたりして笑い合った。そ
れが大人への成長の階段だったのだ
ある。